
L I G H T

J E W E L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L I G H T

【Nコード】

N 1 6 0 2 A

【作者名】

J E W E L

【あらすじ】

怪盗キッドの次なる獲物——それは、呪いを掛けられた天使の人物。天使は以前、3つの『ビッグジュエル』を所有していた。呪いは他人に危害は無い。しかし周りには多くの疑問が……。快斗はとりあえず人形を盗んでから呪いを解こうと考えるのだが……。工藤新一・服部平次・黒羽快斗は親友として登場します。東西の名探偵VS怪盗キッドも。

第1話：標的

春の桜が舞う、昼下がりに。

あるビリヤード店の隅の小さなバーで、2人の人間が話していた。

『定休日』と書かれた看板があるせいか、その2名以外の気配は無い。

ちなみに、本当なら今日は、定休日では無いはずだった。

無い『定休日』を作った理由は、2人の話す内容を他人に聞かれたく無いためだ。

——店の奥で話している、2人の人物——

カウンターの手前にいるのは高校生位の少年。

名前は黒羽快斗。世間を騒がせている怪盗キッドの正体。

もう1人、カウンターの奥にいるのは老人の寺井。人当たりの良い笑顔を浮かべている。

快斗の正体を知っていて、良き理解者でもあり仲間でもある。

今日は、次なるターゲットについて快斗が寺井に呼び出されたい。

「人形お〜？ ジイちゃん本気で言ってるの？」

「はい。」

快斗は信じられないといった表情で寺井を見る。

寺井がターゲットに推薦した物は、人形だったのだ。

ビッグジュエル『パンドラ』を探しているのだし、人形や置物なんかは関係無い。

そう思って、怪盗キッドのターゲットリストからは抜いているのだ。しかし、寺井は至って本気。

——理由があるんだろうな。一応聞いとくか。

「で？ ジイちゃんがそれを推薦する理由と、それを知った経緯は

？」

「昨日人形マニアを名乗る20代前後の男が来まして、『天使の人形』の話をして行ったのです。」

彼の話によると、ある屋敷に魔術物をコレクションしている人物が
いまして、それを所有して
いる、と。

その人形は100年前、本当に生きている天使に呪いを掛けられて
出来た物らしく、相当の価値がある、と…。そして、本当に羽が生
えていると…。」

——ふん。まあ魔女もいるんだ。それなら天使がいてもおかしく
ないか。

「ふんふん、それで？」

「その天使は生前、3つの宝石を所有していて、それは今もまだ人
形と眠り続けているそうです。」

そして呪いが解けた時、天使と共に復活すると言い伝えられている
と。

人形は今とても小さいですが、呪いが解けたと同時に大きく変化する、
とも言い伝えられているそうです。」

——3つの宝石…ねえ。まあ寺井が言う物なんだし、『パンドラ』
の可能性あり…か。

「3つの宝石について、他に何か言っていたか？」

そう話す快斗は、キッドの気配を漂わせていた。しかし、表情は快
斗のまま。

これは彼お得意の、ポーカーフェイス。

「他は、名前だけを言っていました。」

「3つ全部か？」

「はい。まず、右の羽に埋め込まれているのは、SUN—LIGHT
T。

左の羽に埋め込まれているのは、MOON—LIGHT。

ブローチとして中心に付けられているのは、EARTH—LIGHT

T…。」

——成る程な。SUN、MOON、EARTH…簡単に言えば、宇宙の3つの光…。

「太陽、月、地球の光…か。」

そう言う快斗は、もうキッドでは無かった。

瞳をきらきらと輝かせ、子供の無邪気な笑顔を見せる直前。

周りの静かな雰囲気を一気にぶち壊す様な笑顔。

——3つの宝石を一気に盗むのか。上手くいけば名探偵との対決も出来る！

名探偵とは快斗としての親友でもあり、怪盗と探偵としては良き好敵手でもある工藤新一の事である。

互いに新一はかつての江戸川コナン、快斗は怪盗キッドである事を知っているため、友として接する事が出来る。

——でも待てよ？ 今回は呪いとやらが関わってきている。

名探偵を危険な目に遭わせたくないな…。友として、事故に遭われるのは辛い。

「呪いって周りに影響とかあるのか？」

「いいえ。その男が言うには、周りの人間に危害などは与えないそうです。」

また呪いを掛けた人物も、もう死亡しているらしいので、危険は特にありません。」

——よし。名探偵との対決は決定！

「おっけー。じゃ、次のターゲットはそれ。」

——とは言っても、まあ寺井の推薦は当てになるし。断る気も無かったけどな。

「それでは、情報収集は私の方で…。」

「じゃあ俺はちよつと……………」

——名探偵さんを挑発してくる。…とは言えねえな。ジイチちゃん心配すっからなー。

「呪いの解き方を探しとく。」

——これも間違いじゃないし、言っという損は無いだろ。得も無いと思うけどな。

「了解致しました。それではお気を付けて…。」

「情報収集だけだつて。んじゃそっちの方もヨロシクな。」

快斗は寺井に礼を言い、店を出た。

今日は天気が良いので、いつもの帰る道を通らずに、少しばかり寄り道をする。

そこは春爛漫、桜が舞い散る桜通り。

道路とはかなり離れているため、車の音は全く聞こえない。

『さわさわ…』という風と木とが触れ合う音だけが聞こえ、和やかな雰囲気醸し出していた。

日の光と暖かい風を浴びて、桜の花や木々は輝いている様に見える。

——楽しみだな♪ 仕事も久しぶりだし。

なにせ快斗は最近忙しく、情報収集も、怪盗キッドとしての『仕事』も出来なかったのだ。

——警部元気にしてっかな？ 予告状も書かないとな…。

そんな事を思いながら、米花町へと向かう。

——さっつてと、準備準備。名探偵に合わせて予告状を作らないと。どんな暗号にするかなー♪

得意のポーカーフフェイスで表情はいつもと同じだが、心の中は嬉しさで溢れている。

「…………あゝあ…っと。」

桜が舞う中、快斗は疲れを取るために歩を止め、伸びをした。

散る花びらが、周りの雰囲気と和ませていく。

ふと、1つの疑問が頭をよぎった。

嬉しさから、こんな疑問も浮かばなくなっていたのだ。

——寺井に人形の話をした男ってのは、何者なんだ…？ 確か人形マニアって言ってたな…。

呪いの事もよく知っていたし、ただのマニアにしては少しタ

チが悪い。

うゝん……これは俺が調べないと駄目か。

さわさわ、さわさわ。桜の花びらが、風に乗って踊る。

そして彼——怪盗キッドこと黒羽快斗は、再び歩を進める。

信頼する好敵手……そして親友の、名探偵の元へ向かう。

第1話：標的（後書き）

（作者より）

はじめましてw 作者のJEWELです♪

私はまだ中学生で、思いついた物を適当に書き連ねているだけなので読み難いかもしれません。

しかも『まじっく快斗』を読んだ事が無いので先輩の皆様の快斗を参考にさせて頂いています。ゴメンナサイ。

読者の皆様！ 宜しければ、小説の感想を書いて下さい。

『面白かった』はもちろん嬉しいですが、『こんなもん読めるか！』という説教でも構いません。

貰えるだけで、読んでもらっただけで嬉しいです。

あ、もう1つ。こんな私にアドバイスを下さい…。

それでは読者の皆さん、次回をお楽しみに。

第2話：前兆

米花町2丁目21番地、工藤邸。
玄関には、1人の少年。

ぴんぽーん♪

軽快な呼び鈴の音が、家の中で響いているのが分かる。

「新一〜。居るか〜？」

反応は無い。

ぴんぽーん♪ ぴんぽーん♪

――勝手に入っちゃおっかなあ…。

数秒後、ぶつぶつと呟きと、足音が聞こえた。

呟きから、何故かは分からないが、新一の機嫌が悪い事は確かだ。

――ったく、居るじゃねえかよ。

それは心の中にしまっておく。顔はあくまで無邪気なまま。

やっとして扉が開く。

こっちとは正反対に、新一の怒った顔が家の扉から覗かせる。

「あんだよ？」

どす黒い声と気配。かなり機嫌が悪い。

――ううわ。機嫌悪っ！ ま、いいか。

快斗はずかずかとリビングへ向かう。

「だから何しに来たんだよ？」

当たり前、新一の言葉。

「遊びに来たんだよん♪」

にっこりと笑顔を見せ、新一の方へ向き直る。

その瞬間、新一から怒りのオーラが数倍放出された。ついでに言葉も。

「帰れ。俺だって予定が…」

快斗は新一の言葉を遮って話す。

「せっかく来たんだし、いいじゃんか別に。」

名探偵に知られないよう、ちらりと新一の手にある物を見る。

そこには、確か今日発売の推理小説の本。

――成る程ね、怒るわけだ。じゃ、遊ぶのは止めとくか。

新一は2度読み好き。恐らく寝る前に1度読もうと思っていたのだろう。

彼にとって、それを邪魔されるのは怒って当然な行為。

「新一の邪魔しないようにするから、上がらせてもらうよ♪ お邪魔しま〜す♪」

「ったくよ。」

――と言ってもやる事無いし…。あの男の事でも調べとくか。

「新〜、パソコン借りるよ。」

「勝手にしろ。」

快斗は早速、あの男について調べ始めた。

パソコンをつけ、キッドの正体がばれない様に他人のIDを使う。

いつもの方法で、あっという間に男の個人情報が出る。

――ふ〜ん。本名は斉藤青樹、職業は人形鑑定士。ついでに魔術研究教授で22歳。

なんだそりゃ。そんなもんがあるのかよ…。

鑑定士…ねえ。ジイちゃんには人形マニアって名乗っていたよな…。

ん？ 青樹の生涯…？

〜青樹の生涯〜

1983年7月12日、誕生。

〜中略〜

2003年5月6日、20歳にして正確な目を持ち鑑定し、新人表彰。

2003年7月、本格的に事務所を開く。

2003年～2005年まで、150体以上もの人形を鑑定。
2005年4月21日、交通事故。22歳にして死亡。

「!!!!」

——なっ!

快斗の目が見開かれた。

『死亡』の言葉に反応したのだ。

——そんな馬鹿な。ジィちゃんに会ったのは確かにこの男の筈だ。

死んでいる筈が無い。男の正体はなんなんだ?

「…………おい、快斗。」

後方から新一の言葉。

一瞬で、快斗は冷静になる。

「んー?」

「何してるんだ?」

——新一が読書してる時は滅多に自分から話さないのに…。

「お仕事。」

簡単に、嘘ではない答えを返す。

「おい…? 仕事ってまさか…。」

新一が『嘘だろ?』とでも言うような声で返す。

——まったく、分かっているくせに。

「当たり前じゃん♪」

後ろを振り向くと、ソファ―に座っている新一が居る。手には本。

快斗はニツと、悪戯っ子のような笑顔を向けてやる。

と、先ほどとはまた別の、探偵の瞳になっている新一が。

お返しに快斗も、キッドの瞳を見せてやる。

——これだから面白いんだよなあ。新一は。

「もちろん、招待してくれるよな?」

「その時になったら…ね。準備はまだ終わってないから。」

2人は静かに睨み合っている。

他人が見れば、火花が散っている様に見えるだろう。

なにしろ、この2人は好敵手：ライバルなのだから。

とは言っても、今はまだ対決する状況では無い。

いつもキッドとしての仕事の前に起こる、前兆みたいなものだ。

「…負けないからな、名探偵。」

「それはこっちのセリフだ、怪盗キッド。」

フツと、はじめに緊張を解いたのは快斗。にぱっと、無邪気な笑顔に戻す。

それを合図に新一も緊張を解く。

快斗はパソコンへ向き直った。

一応、青樹の顔写真を印刷しておく。

——まあ、顔写真をプリントして寺井に見せるか。その方が手っ取り早いし。

候補は一応5人にしといて…っと。この中に居る事は確かだな。

後は盗む日を決めて、予告状を作って、下見をして。

忙しいなあ。…ま、慣れてるから良いんだけど？

時計を見ると、6時半。

窓の奥は薄暗くなっている。

快斗はとりあえずパソコンの電源を切り、情報収集を止めた。

「んじゃ新一サンキュー。帰るわ。」

「早く帰れ。」

——まだ怒ってるな。平気だけど。

快斗は心の中で苦笑した。

「じゃなく。」

「………気を付けて帰れよ。」

新一から快斗への、思いやりの言葉。友を心配するのはいつも変わらないのだ。

しかし恥ずかしいからか、まだ怒っているのか。声が小さい。

「ああ。新一もな。」

快斗も小さく返事をする。

——サンキュ。新一。

快斗は玄関の扉を開けて外へ出た。

春といえども、夕方や夜はまだ涼しい。

気持ちの良い風を浴びながら、快斗は自宅へと向かっていった。

第2話：前兆（後書き）

（作者より）

L I G H T 第2話です。

快斗の様子を見る限り、盗むのはまた遅くなりそうです。（おい）
東西の名探偵VS怪盗キッドご期待の皆さんごめんなさい。

第3話はまだ書き始めてないので大変です…。

急いで書きたいと思います。スイマセン…。

短いですが『作者より』は以上です。

読者の皆さん、ここまで読んで下さってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1602a/>

L I G H T

2010年10月21日20時24分発行